



A. 土間から床のあるDKへ B. 設備等の機能の充実
C. 座敷や板の間などの「ゆか座」の生活

一般の住宅に限らず伝統民家においても、時間的ずれはあるものの、ライフスタイルの変化にともない台所や食堂、トイレや浴室等、和式から洋式へと変化している。畳による「ゆか座」式の生活も、和洋の両面性をもつ「板の間」化への志向も強い。浴室やトイレ、台所や食事室はほぼ完全な洋式の「いす座」化がなされ、さらに寝室や居間等の洋式化への流れもある。土足で暮らす洋式ではなく、床との親しみを持つわれわれは、和洋併用の暮しでも「床の感触」は快適性にとって重要な役割を果たすと考える。

なお上図の平面図は一例であり、またA. B. C. のそれぞれの位置や大きさは仮定したものである。

●床材の軟(左)から硬(右)の一例 (5. データ資料参照)



●暮しと床

床の素材の選定は、住み手が床とどのように付き合うかという生活観を解読する必要がある。床材は自然素材から工業製品まで多種多彩であり、特に「フローリング」という記載は「木質系」床材を指すため誤解のないよう指定する。床暖等特殊な場合を除き、素材は「無垢板」に限定する。

築年代が100年ほど遡る民家の多くは改造されてはいるが、調査結果からも土間とゆか座で構成された間取りに拘束されつつ、使われていることがわかる。4の補遺参照されたい。

左図は関東地方(千葉・茨城)の民家の間取りである。重文指定のため創建時の間取りに復元され、床材は板張り畳敷きで構成されていた。現在の民家は大半が畳敷きの座敷になっている。

近現代までの生活様式は「ゆか座」と「いす座」が併存し、それに伴い床材も変化してきた。今日の建売住宅などでは「いす座」が支配的傾向にあり、工業製品の複合フローリング材が普及している。これらの床では「座る・寝ころぶ」行為に対して素材の質感に重点を置いているとはいえない。

●素材の感触と価値

床材に触れた時、「冷たい」と感じる理由は、保温性や断熱性とは違う性質とされる。それは手で木に触れた場合、手から木に熱が移動し、接触面の温度がある平衡値に急激に変化することによる。ある平衡値とは材の熱伝導率、熱容量、接触圧、接触面の性状により決まる。熱伝導率、熱容量、接触面等が小さいと平衡値は材温より手の温度に近くなるため、温かく感じることになる。金属は全く逆で、平衡値は金属の温度に近くなり冷たい。(注)

熱容量は物体の重さに比熱を掛けたものである。気乾状態(含水率15%)の木材の比熱は0.38で鉄やガラスなどよりも大きい。鉄に比べ質量/重さが極めて軽いため、計算上熱容量が小さくなる。また木材(ヒノキや杉)の熱伝導率は、ステンレスに比べ200分の1程度である。したがって平衡値が手の温度に移行する作用が働く。

通常、無垢の木の冷たさ温かさの判断は、材の「硬軟」でおよその目安は可能である。

●選択の指標

代表的な木材の気乾比重と硬さ			その他の樹種の硬度
樹種	比重	硬度	
きり	0.29	甚軟	甚軟：とうひ・えぞまつ・とどまつ・さわら・ねずこ
すぎ	0.38	↑	
ひのき	0.44		軟：あかまつ・からまつ・ひば・とち・くるみ・しな
なら	0.68		
けやき	0.69		甚硬：こなら・うわみず桜
こくたん	1.20	最硬	

【指針】工業系木質フローリングに比して無垢材の木の床は「寝ころぶ・座る」という行為に抵抗感がなく柔軟性に富む。国産材のコストも工業化製品に比べ費用対効果の面からも住み手の負担は軽い。またメーカーの都合による廃版もなく、経年変化、冷たさのない快適仕様を確保できる。

注：「木材活用辞典」の記述を参考とした。

column 《日本農林規格JASにおける床板の分類》

JASによる「フローリング」の定義は「主として板その他の木質材料からなる床板であって、表面加工その他所要の加工を施したものを言う」とある。フローリングの体系は単層・複層に分類し、さらに細かい種別がある。大半は何らかの工業製品化された材であり、無垢板は「単層フローリング」に属するが、「基材に厚さ1.2mm未満の単板を張り合わせた床材」も「単層フローリング」とされ、仕様規定上紛らわしいのが難点である(※巻末用語の説明参照)